

おもてなしから始まった。 未来の港まちを想う、 女性たちの応援団

一般社団法人
気仙沼つばき会

遠洋マグロ漁船の基地として発展してきた宮城県気仙沼市。水産業を軸にした文化が息づく港まちで、漁船を見送る伝統的な行事を盛り上げてきたのが、「気仙沼つばき会」の始まりだ。東日本大震災後、「気仙沼で暮らす人たちが、もつといきいきと生きられるまちにしたい」と気仙沼の魅力発信へ舵を切ってきた。そんな彼女たちが次に目を向けたのは、地域に横たわるジェンダーギャップの解消だ。2023年に法人化してからは、未来の女性リーダーや政治に関心がある人を育てる「勉強会チーム」、そして女性主体の新しい産業を模索する「水産DXチーム」に分かれ、小さな検証を重ねている。誰をも温かく迎え、その背中を見送ってきたつばき会が、自らの航路を切り拓いていく。



(左から)中居慶子さん、千葉可奈子さん、斉藤和枝代表理事
(2026年2月9日最終発表会参加者)



宮城県気仙沼市、「気仙沼みらいアクション」

<https://kesennuma-tsubakikai.com/>

漁師を見送る、 女性たちのおもてなし

大漁旗が風をはらみ、岸壁からは色とりどりの手旗が上がる。晴れ晴れとした笑顔で手を振り続ける、地域住民の声が響いている。

安全な航海と大漁を願い、乗船員の家族や漁業関係者によって受け継がれている気仙沼名物「出船おくり」。そのにぎわいを支えてきたのが、当時「おもてなしを考える女性の会」として誕生した気仙沼つばき会である。

2009年、「気仙沼観光を盛り上げてほしい」と依頼を受け、地元旅館の女将たちが中心となって立ち上がった。当初は同業者の集まりだったが、次第に地域で水産加工や飲食店経営を行う



出船おくりを盛り上げる気仙沼つばき会



(左から)斉藤和枝代表理事、高橋和江理事

「出船を盛り上げてもらえないか」との声を受け、女性たちが港に集まった。こうして始まった出船おくりは、ときに300人を動員して大漁旗を掲げてきた。仕事の合間に立ち寄る人、観光客などが集い、港全体ににぎやかさが戻っていった。

震災後、 まちの誇りを可視化する

2011年3月、東日本大震災が発生する。漁港施設はじめ、水産加工場や関連施設が甚大な津波被害を受け、活気溢れていた港まちは一変した。暮らしも産業も立ち行かなくなる中、メンバー間で「漁師さんを大事にしよ



漁船が停泊する気仙沼漁港

う」、「気仙沼を知ってもらおう」という想いを共有した。

こうして2013年に立ち上がったプロジェクトが、地元漁師の仕事を取り取る「気仙沼漁師カレンダー」だ。最初は市内でも懐疑的な声が上がっていたが、次第に共感者を増やし、10年かけて10作品の制作・販売に奔走した。

この活動と並行して、月1回の定例会を開いて、落語家を招いたイベントや、来訪者に朝ごはんを振る舞う企画も展開する。代表理事の斉藤和枝さんや理事の高橋和江さんなどの目に止まった女性たちをスカウトしてきた気仙沼つばき会は、Uターンや移住者メンバーを含めた20〜80代約20人がメインに活躍する団体へと成長した。

同市出身で、気仙沼つばき会事務局



震災後に想いを込めてつくられた「福来旗(ふらいき)」

千葉可奈子さんは、震災前後に都内の市場で働いていた経験がある。労働人口の多い都心では、個を求められることがないと感じていた。復興が進む2017年に地元に戻ったとき、気仙沼つばき会のメンバーから「かこちゃん（可奈子さん）は何やりたい？何をしたら面白いと思う？」と声をかけられた。一方的に役割を与えられるのではなく、自ら選ぶことができる。「これまで、そんな声をかけてもらえることがなかったんです。地元には私にしかできないことがあるのではないかと、エンパワーされました」

気仙沼漁師カレンダーの制作に区切りがついた2023年、メンバーたちで「次は何しよう」と話し合った。そのタイミングで重なった想いと出会いが



気仙沼つばき会の千葉可奈子さん

握るテーマとして「意思決定プロセスへの女性参画」と「漁業分野におけるジェンダー平等」を掲げた。それぞれを「勉強会チーム」と「水産DXチーム」に分け、団体として取り組むことを決めた。

メンバーによって、ジェンダー課題への関心の入り口は異なる。千葉さんが課題に向き合う原点となったのは、都内の市場で働いていたころの経験だった。深夜勤務で、出会いの少ない男性社員の「嫁候補」として女性が採用されるような職場で、「寿退社」が多かった。結婚した女性たちは、夫の激務を前提にワンオペで子育てを担う生活に。2011年当時、社内に産休を取

得した女性はいなかった。

そうした現実を見つめながら、千葉さんはこう振り返る。「女性として生き



気仙沼つばき会の中居慶子さん

るって、おみくじみたいだなと思ったんです」。良い相手に巡り会えれば安泰。しかし、相手の男性次第で人生が左右されてしまう。引いてみなければ結果がわからない「おみくじ」のような不確実さや不自由さを感じた。

将来のことを考えたとき、目の前にあるのは、キャリアを貫き独身で働き続ける道か、結婚・出産を機にキャリアアコースから外れる道かという、二項対立だった。その違和感は、自分自身だけでなく、これから生きる子どもたちの未来をも狭めてはいないか、という問いへつながっていく。

気仙沼つばき会では、やりたいと思うことに、自ら手を挙げて取り組む「手挙げ制」が基本だ。気仙沼のジェンダーギャップの解消という新たなテーマ



気仙沼つばき会の小柳朋子さん

は、千葉さんをはじめとするメンバーの提案と熱意から始まった。

また、2014年に都市部からUターンした同市出身の中居慶子さんも、地元でのジェンダーギャップを感じていた。都市部では一個人として扱われていたのに、地元では「女性として」見られているような感覚。責任のある仕事を全うしていても、家事や仕事の準備は女性の役割とされる。はびこる無意識の性別役割分担に疑問を抱き、千葉さんたちの思いに共感した。

2015年に気仙沼へ移住した小柳朋子さんも、地域に根づく「古き良き役割分担」の空気に違和感を抱いていた一人だ。幼い娘を育てる中で、「これから育っていく世代の子どもたちにとって、よりよい環境をつくるきっかけになるなら挑戦したい」と、勉強会チームを牽引した。

暮らしの中で芽生えた疑問や違和感は、個人の問題ではなく社会の問題だった。持続可能な地域の未来に目を向けたとき、気仙沼つばき会とジェンダーギャップ解消の課題はごく自然に交差し、メンバー間で支持を得ていった。

政治という意思決定層に女性を

中居さんの印象に残っているのは、YUIみらいプロジェクトの各団体が集ったキックオフ会だった。「全国各

あった。

ジェンダー課題と気仙沼つばき会の交差点

気仙沼つばき会には、経営者、会社員、自営業者など、さまざまな立場や経験を持つ女性たちが集っている。発足当初から、全員が「ジェンダー平等」を強く意識していたわけではない。それでも、会として共有していた合意がある。それは、「地域の未来にとって良いことに取り組む」という一点だった。

次の活動を模索していたころ、千葉さんと縁のあった公益財団法人みらいRITA代表理事の菰田綾子さん、ジェンダー・エキスパートの大崎麻子さんが気仙沼市を訪れ、役員メンバーと気仙沼の課題について意見を交わした。歴史的に男性が主力となってきた水産のまちでは、女性が活躍できる職種が少なく、若い女性のUターン率が低い。斉藤さん、高橋さんは、自らも会社を率いてきた経験から、「男女を問わず働きやすい環境を整えることは、個々人のやりがいや成長につながり、長期的には企業や地域経済にとってもプラスになる」という実感を持っていた。

気仙沼の未来を考えたとき、「性別にとらわれず、誰もが自分らしく最大限に力を発揮できるまち」を目指すべきではないか。そうして応募したYUIみらいプロジェクトでは、今後の鍵を



最終発表会団体報告の様子

地で、さまざまな分野からジェンダー平等に取り組もうとする人たちの熱を感じたとき、みんなで一斉に動けば社会は変わるかもしれないと思えたんです。私はそこからスイッチが入りました」

とはいえ、方向性が決まるまでには紆余曲折があった。地域の中であらゆるアクションを起こし、政治を通さずとも地域を変えた成功体験があるメンバーたちにとって、「地域の政治を変える」ことは遠回りのように思えたのだ。

それから、勉強会チームでは「女性の意識改革」と「女性の政治参画」の二本柱で活動を重ねてきた。気仙沼市では、女性の大学進学率や投票率は高い一方で、非正規雇用の多さや賃金格差、女性のU/Iターン率の低さなど、生活実態とのギャップがある。さらに、市議会では24議席中女性が一人にとどまり、「市政を決める場に女性が少ない」課題も浮き彫りになっている。

それならば、まずは「政治や議会はわからない」という心理的ハードルを下げることから始めようと、全4回の勉強会を企画した。市内の約20人が参加した勉強会では、ジェンダーの専門家などからも「なぜ女性が意思決定の場に関わる必要があるのか」「どう関わっていくのか」を学んできた。

その最終回では、東京都武蔵野市議会議員のさこうもみさんを招き、「議員という仕事を『転職』として捉える」と

いう視点から、政治参画を自分ごとにしてきた経緯を聞いた。

2026年4月には、気仙沼市議会議員選挙が予定されている。意思決定の場に一人でも多くの女性を増やせたら、このまちをもっと多様で住みやすい故郷にできるのではないか。勉強会チームは、そんな未来を描いた。

アクションする人を支える環境づくり

さこうさんは、民間企業で働いた後、2023年の選挙で無所属で市議に当選した。「政治家になりたかったわけではない」としながらも、民間企業で社会課題に向き合う中で、税金の使い方や議会の影響力を実感し、「より課題



勉強会に登壇する武蔵野市議会議員のさこうみづみさん

解決に近づける仕事」として議員を選んだと語る。

民間で培ったスキルや人脈を活かしつつ、さらに行政の知識が加わることで「将来の選択肢も広がる」とさこうさんは話す。「議員は転職の一つとして選べる」こと、「多数決で勝たなくても、自分の意見は制度に反映される」こと。政治家になったからと言って、全てを請け負う必要はないのだと、女性たちの背中を押すエピソードの数々に、司会を務めた千葉さんは大きく頷きながら「男性的な長時間労働モデルに迎合しない政治参加のかたち」になり得ると応じた。

会の最後には、それぞれに感想と「アクション宣言」を発表してもらう時間を設けた。千葉さんをはじめとする気仙



勉強会の司会を担う千葉さん

沼つばき会のメンバーは、今後もいち個人として「立候補を考えているさまざまな女性に伴走し、寄り添う仲間でありたい」と宣言した。会場の温度が上がっていた。

行政や社会に「こう変わってほしい」と外側から望むのではなく、自分たちが当事者として関わり、変えていく。千葉さんは、「勇気を出して一歩踏み出す女性を応援していきたい」と思っています」と語る。そして、「声を上げたり、アクションを起こしたりする人がきちんと支えられる環境をつくりたい。選挙は立候補する人だけのものではなく、市民みんなでつくるものだと思うんです。誰かを選ぶ側であると同時に、地域にいる私たち自身が、選挙をつくる当事者になることが大切。そ



勉強会の感想を話し合う参加者



アクション宣言の時間で発言する高橋さん

の感覚を、より多くの人と共有しながら、一緒につくっていききたいと思っています」と熱を込めた。

参加した女性からは「政治家は男性になるイメージで、誰に投票しても同じだと思っていました。今回の勉強会で、新しい考え方を知ることができたと、何より楽しかった。私たちの声を聞いてくれる気仙沼つばき会の存在は大きいし、『大変だね』で終わらせず行動するメンバーの姿に心強さを感じています」と、前向きな感想が出ていた。

勉強会チームを見守る高橋和江さんは、「今回の勉強会で、女性たちが職業の一つとしての政治家を志すことのハードルが下がったように思います。楽しいから続いできた活動の先にある、若い人が住みやすいまちづくりには、

きつと気仙沼の存続がある。エネルギーのある世代に頑張ってもらいつつ、フォロワーできる存在でありたい」と後押ししている。

勉強会チームでは、家庭におけるジェンダー平等を考えるための小冊子「時代は変わった。では、あなたは？」も制作した。企業に縛られ家庭に関わりたくても関われない男性の現状や、意識を変えて実践を始めている若い世代の姿も紹介し、誰もが「自分ごと」として受け止められるようなものを、各家庭へ届けた。ジェンダー平等への意識改革のきっかけづくりを進めている。

漁業の中に、私たちの居場所を

一方、水産DXチームでも、新たな挑戦が動き始めている。

「これまでの水産業は、完全に男性的な世界観の中で回ってきました。そこに女性が一人、二人入って『良かったね』、合わなければ『ダメだったね』と切り捨てられてしまう。男性中心の構造の中に女性を適応させるやり方では、何も変わらないと気づいたんです」。そう語るのは、自らも水産業でキャリアを築いてきた斉藤和枝さんだ。

既存の世界観に女性を迎え入れるのではなく、女性が主体的に参加できるフィールドそのものをつくる必要がある――。その気付きが大きな転機だった。体格別の競技のようなイメージ

で、それぞれの価値観や強みを発揮できる場をつくる。その先に、性別を横断した「世界観」で仕事を選ぶ選択肢を増やしたいと考えている。

きっかけは、若い世代の言葉だった。「気仙沼で漁業で稼げたらいい」と語る女の子の姿。そして地元経営者から聞いた「結局は水産業が儲かっていればまちは回る」という現実。その両方を前に、斉藤さんは「これは覚悟を持って向き合うテーマだ」と感じた。気仙沼つばき会に持ち帰ると、半数以上が「水産DXをやりたい」と手を挙げた。

YUIみらいプロジェクトの助成を受けた国内外調査の末、着目したのがプランクトンを培養したり、テクノロジーを活用したりする陸上での「カキ養殖」だ。カキが入った重量のあるカゴの上げ下げを、人力から機械に変えるなどの工夫によって、筋肉量に関わらず誰もが活躍できる可能性を秘めているのだという。

ただ、実用に向けた道のりは平坦ではない。沿岸域利用の規制や海水排出に関する制限など別の制限があり、想像以上に高い壁に直面した。現在は大学の研究者と連携し、実証実験に取り組もうとしている。

「女性がきちんと稼げるようになれば、漁業の現場でも発言が届くようになるはず。実績のある人の声は、きちんと聞かれる。その中に私たちが入っていくことを目指しています」。沿岸漁業は

高齢化が進み、人手不足が深刻だ。このままでは担い手がいなくなる未来も現実味を帯びる。待ったなしだからこそ、自分たちでつくる。その覚悟が固まった。

気仙沼つばき会が漕ぎ出す、新しい未来

活動による社会全体の変化は「まだまだこれから」だけれど、中居さんは確かな手応えを感じたという。「社会の構造を変えるには、意思決定の層に女性たちが入っていく必要がある。そのことが、私たち自身の中に強く刻まれたと思います」。そして、「多様な背景を持つ人が意思決定の場にいないければ、違いは反映されにくい。政治に限らず、地域の企業やコミュニティにも、多様性をもっと広がつていくことが必要だと思えます。もし今回の取り組みをきっかけに女性リーダーが誕生すれば、それは議会だけでなく、ほかの分野にも希望や刺激を与えるはず。そうした変化が連鎖し、さまざまな人が力を発揮できる地域になっていくことを願っています」と希望を抱く。

「子どもたちが進路を選ぶときも、住む場所を考えると、ちゃんと自分で選べる社会であってほしいと思っています」と話すのは、小柳さんだ。「性別を理由に、選択肢が狭められないこと。そして、その選択が周囲から認め



YUIみらいプロジェクトメンバーと気仙沼つばき会

られること。見守る大人も、選ぶ当事者自身も、選ぶ権利があるんだと当たり前に思える社会になってほしい」。そんな気持ちで、これからも活動に邁進するつもりだという。

千葉さんは「ここで、自分の可能性に気づかせてもらいました。だから次は、私が返す番だと思っています。海とともに生きるこの港まちを、誰もが『やってみたい』と声に出せる場所になりたいんです」と話す。千葉さんの視線は、まっすぐ先を見据えている。

海へ出て挑戦する人たちを、港から見送り続けてきた気仙沼つばき会。今度は、自らが帆を上げる。にぎやかな「未来」の気仙沼港から聞こえてくるのは、彼女たちへ向けた大きな声援と、惜しみない拍手だ。